

松蔭女子学院の長期ビジョン

1 創立 140 周年に向けて

松蔭女子学院は 2032 年に創立 140 周年を迎える。それに向けて、本学院での教育の根幹たる人間形成に関して、どのような生徒や学生の育成を期待しているかを明確化しておく。

松蔭女子学院では、2017 年度に学院のモットーとして、「一粒のからし種」を制定し、それに基づいて、松蔭中学校・松蔭高等学校（以下「中高」）では Open Heart, Open Mind、神戸松蔭女子学院大学・大学院（以下「大学」）では、Open Yourself, Open Your Future というモットーを定めた。

上記のモットーに基づく人間形成のあり方が、中高・大学それぞれの組織で具体化される際に、それらの基本にある柱として、

1. キリスト教主義を重要な前提とする
2. 多様性を生かした教育を実践する
3. 神戸の地域性に立脚した社会貢献に役立てる

の 3 つを設定する。

2 教育ビジョンの 3 つの柱

本学院では、中高・大学を通じての教育に際して、次の 3 つの柱を中心に据えることとする。

1. キリスト教主義-社会に貢献できる力の育成
自己の確立に向かう途上の生徒・学生が、キリスト教主義に基づいて、平和な社会・世界を志向し、他者と共に在ることの大切さを認識し、互いの協力・協働によって、主体的に行動できる力をもった人として成長し、実践していく。
2. 多様性の理解と受容を生かす教育
生徒・学生の一人一人が、自分は、神の似姿 (Image of God) によって創られ、他者と比較することができない、価値ある「個」であるという意識をもつ。それとともに、多様性への認識を深め、自分と異なる「他」の存在を受容し、多様性を前提とした上での教育の利点を理解する。
3. 社会貢献-持続可能な環境・社会への意識
生徒・学生が、周りの自然環境・社会環境を正しく理解して、自然を愛し、自然と共生するとともに、共同体社会の構成員として、地球環境に配慮して、SDGs に例示されているような目標の実現を目指し、将来にわたって持続可能な社会を維持していこうとする態度を育成する。

以下では、上記の教育目標について、聖書からの引用を加えながら、説明を加える（聖書からの引用は、日本聖書協会による『聖書協会共同訳』（2018）から）。

2.1 キリスト教主義に基づく社会に貢献できる力

平和な世界の維持に務め、そのような社会に貢献することのできる人材の育成はキリスト教主義の学校として大切な教育目標であり、適切な問題提起ができる人材の育成を目指す必要がある。生徒・学生の成長段階に応じて、能力に応じた行動に移すことができる人材を育成していかなくてはならない。

コリントの信徒の手紙一の12章で、聖パウロは、教会を人間の体に喩え、「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分は多くても、体は一つ」(12:12)であり、足が「私は手ではないから、体の一部ではない」(12:15)と言ったり、目が手に向かって「おまえは要らない」(12:21)と言って他の存在を否定したりすることはできないと述べている。それに留まらず、見劣りする部分も、かえって尊いものとして体の一つにまとめあげているのが教会であると聖パウロは言う。全体と個とが生きた統一体として存在し、個々の固有性を発揮すればするほど、全体が生かされてくる。これが有機体の本質なのである。

したがって、次項で述べるように、自己を確立し、多様性の受容に至ったとしても、そこにとどまっていたら、ばらばらの「個」が互いに関係をもたずに存在しているにすぎない。多様性の認識・受容から一歩進んで、多様性の中で「他」と協働していく力につなげていかなければならない。確立された「個」は、「他」と協働して、社会的存在となるのである。中学から大学・大学院にかけての人間の成長という観点からも、他と協働し、他のために行動する態度を学ぶことは重要である。

2.2 多様性の理解と受容

「神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し、男と女に創造された。」(創世記 1:27)と創造物語は述べている。「創造した」のヘブル語「バラ」は、姿かたちを確認することができないイメージに沿ってという、神の内面性をあらわしている。人間に自由意志が付与された点で、人間は神に最も似ているというのがユダヤ教のラビ(聖職者)たちの見解である。この自由意志によって神に応答するのが人間本来の姿となる。被造物への愛によって、神はこの世界を創造されたが、人間は、神のように、神や他者を愛することができる存在であり、このような、愛への明確な認識は、被造物の中で人間だけがもつ。自分と異なる「他」の存在のはじめはアダムとエバであるが、自分と異なった人たちを価値ある存在として認め、共に向き合うことが人間本来の生き方となる。

本学院の教育は、まず、生徒・学生の一人一人が、自分自身のアイデンティティ、すなわち自らの「個」を確立することを目指す。そして、自分が、他者に従属することのない、かけがえのない存在であるとの意識をもった上で、自分と異なる「他」を受け入れ、尊重していく意識を醸成していくことを期待する。

中高・大学という共同体には、多様な構成員がおり、人種、性別、国籍、生活習慣、肌の色、宗教、信条、文化、伝統、意見、言語などに多様なあり方があり得る。それらを理解し、すべて受容していく点に、キリスト教主義の教育機関らしさがあると考えられる。

多様性と相容れないのが、伝統的・保守的なジェンダー観である。後者は、既存の社会的な階層性・乖離を是認する価値観に支配されており、そのような価値観を打ち破る意味あいをもった教育には重要な意義があると考えられる。多様性が重要であると認識することにより、多様な人々、多様なジェンダー観が存在する現実に直面しても、それを受け入れ、自然なものとして捉えられるような教育を実施することができる。

もちろん、多様性を認識することと、その受容との間には、一定の距離があることは確かである。そのような距離を踏まえ、世の中の多様な存在を理解することから出発し、生徒・学生の成長に応じて、多様性の様々なあり方を柔軟に、抵抗のない形で受容できる力を養っていくことが肝要である。

2.3 持続可能な環境・社会への意識

ノアの洪水の後、神は「すべての肉なるものが大洪水によって滅ぼされることはもはやない。洪水が地を滅ぼすことはもはやない。」(創世記 9: 11)とノアと彼の息子たちに約束し、自然を正しく管理することは人間の使命であることを再確認している。人間は生態系保全の責任を担っているが、

人間が、被造物に対して蔑視したり破壊したりすることは、土を「耕す」だけでなく、それを「守る」ように神から委託された（創世記 2: 15）意図に反する行為である。

1990 年、全聖公会は、宣教指標の 5 番目に「自然と共生することにより、地球の命を守り、育む」を加えた。国連においても、2015 年の国連総会において、「地球の環境を悪化させない。富める国でも貧しい国でも広がる一方の格差の解消やジェンダー平等などを 2030 年までに達成する」という SDGs (Sustainable Development Goals-持続可能な開発目標) を推進している。

社会への貢献は、人間関係だけに留まらず、人間と周りの自然環境を含めた生態系の問題として捉える必要がある。気候変動など、自然が脅かされる現象が顕著になっている今の世界にあって、地球環境や自然環境の保全を含む、持続可能な社会の実現に真正面から取り組むことが緊急課題になっている。

生徒・学生による、環境・社会を対象とした様々なボランティア活動を幅広く発展させ、積極的に関わりをもっていく志向性を育成することが重要である。

3 本ビジョンの実現がもたらす効果

3.1 社会貢献とキリスト教主義教育

社会貢献の重要な一端は、身近な地域貢献である。本学院は、神戸という国際性にあふれる街に位置しており、キリスト教との親和性も高い。海と山の両方に特色をもつ灘区という環境は、多様性を生かせる場でもあり、学院の近隣には、本学院が今までもキリスト教センターを中心としたボランティア活動によって貢献してきている多くの地域・施設がある。地域的であるとともに普遍的な貢献の様々な形態が考えられ、工夫していける余地は大きい。

3.2 多様性の中の女子教育

松蔭女子学院は、女子教育を特色とする教育機関としての長い歴史をもつ。その歴史を踏まえつつ、今日の視点からは、より一般化した方向へ発展させて、多様化を認める教育という形で実践していくことができる。男女の固定された役割分担にとらわれない、多様な経験を積むことを基本としてきた、本学院の教育方針をさらに普遍的なものとしていくのである。

また、それが、学院を卒業した後の人生において、大学のモットーの一つである Open Your Future という形で、将来の社会的地位の向上にも結びつくような意識の育成につながっていく。

3.3 受信力に裏付けられた発信力による持続可能な社会への貢献

社会貢献を可能とし、持続可能な自然環境・社会環境の維持へと結びつけるためには、基礎力として、生徒・学生が、自分が理解し把握した様々な問題の解決案を社会に向かって提起していくことができる能力をもつことが必要である。すなわち、受信力の高さに裏付けされた発信力を高めることを目指すべきである。

発信力は一方向的なものであってはならず、発信の段階でも、相手の存在を意識し受信しつつ発信するという両方向性をもった「コミュニケーション力」に発展していかななくてはならない。論理的な思考力を身に着け、ことばの理解力・運用力を高めるとともに、社会に向かって自分の思い・考えを発信する能力を育成する。

本学院では、中高・大学を通じて、受信し学んだことを発展させて、社会に活かす基で発信していく能力を育成することを実践してきており、社会に出てから活用できる技能・資格にも結びついている。